

大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3132 号 2016.7.16 発行

法人経営見通し悪く WAMが福祉版「短観」を初公表

福祉新聞 2016年07月15日 編集部

福祉医療機構（WAM）は6月28日、特別養護老人ホームの経営者に現場の実感を聞く「社会福祉法人経営動向調査」の結果を公表した。4半期ごとに現場の実感を発信するもので公表は初めて。6月の景気について尋ねた業況は「良い」が「悪い」をわずかに上回ったが、先行きは悪化の見通しを持つ経営者が大勢を占めた。

調査は、日本銀行が企業に対して行う「短観」の福祉版。WAMは調査に協力してくれる社会福祉法人を公募し、これまで2015年12月と16年3月にも調査を実施していた。

6月の調査は、特養ホームを運営する391法人を対象に実施。ウェブを通じて、383法人が回答した（有効回答率98%）。

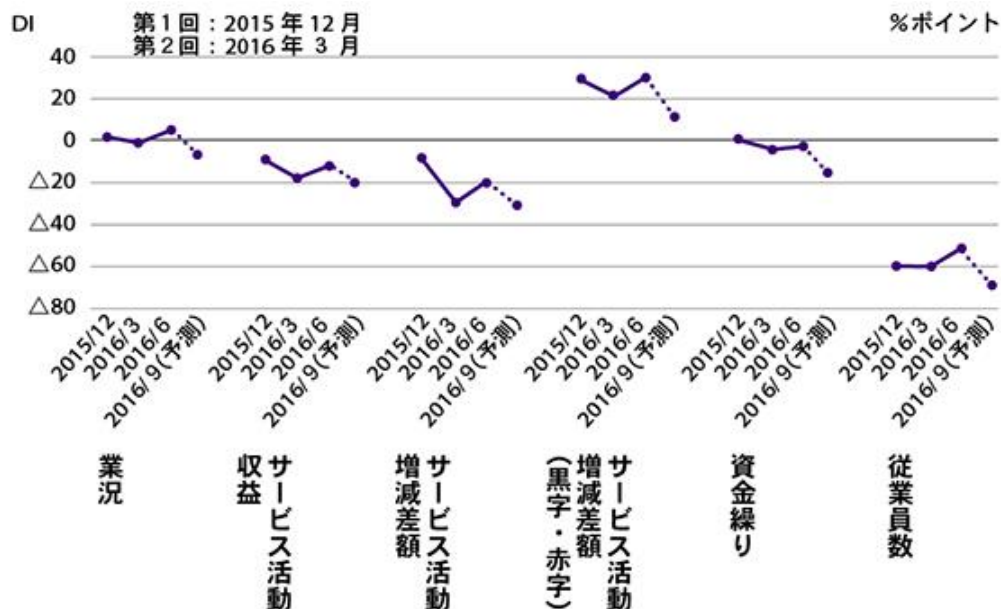
それによると、法人の業況を3択（①良い②さほど良くない③悪い）で尋ね、「良い」と答えた割合から「悪い」と答えた割合を引いたDI値は5だった。ただ3カ月後の先行きについて聞くと、マイナス8と悲観的な意見が多かった。

法人規模別のDIは、定員100人以上の大規模法人が16、定員が30～99人の中規模法人が6とプラスだった。これに対して、定員29人以下の小規模法人はマイナス11と大きく差が開いた。

一方、企業でいう売りに当たるとなるサービス活動収益について法人全体に聞いたところ、DIはマイナス13と減少した法人が多かった。同様に、利益に当たるサービス活動増減差額もマイナス20と厳しい結果だった。ただ、黒字か赤字かを聞いたDIは30と、黒字の

法人が多かった。

また従業員数については、D Iがマイナス 53 と人材不足が顕著。資金繰りもマイナス 3 で、厳しいと答えた法人が多かった。



このほか、経営上の課題について聞くと、職員確保難（78%）を挙げた法人が最も多かった。続いて、人件費の増加（66%）、収益の低下（57%）、人件費以外の経費の増加（22%）だった。

また、効果を感じられる採用活動については、ハローワーク（54%）が最多で、福祉分野対象の合同就職説明会（39%）、実習などの受け入れ（34%）と続いた。福祉人材センターは9%だった。

調査について、WAM経営サポートセンターの関悠希氏は「これまで福祉現場の経営は厳しく、人材不足は深刻という声は多かったが、定期的に数値で把握する仕組みはなかった。結果を社会福祉政策に生かしてもらえれば」と話している。

41歳で脳梗塞を患ったライターが、自らの病をルポする 『脳が壊れた』 東 えりか  
ダイヤモンドオンライン 2016年7月15日



「宝物」と言っているつもりが PCの音声認識は「ああああ」に健康診断を怠っている。フリーランスになってからというもの、よっぽど具合が悪くなく

れば医者に行くということもない。しかし、自分の健康を過信しているわけでもない。物忘れがひどければ「若年性の認知症？」と怯えるし、動悸が激しければ「心筋梗塞？」と脈を計る。手足が痺れると「脳梗塞」を疑い、しばらく様子を見たりする。

『脳が壊れた』 鈴木大介著  
新潮新書 240p 760円(税別)

一般的には60歳以上に多いという脳梗塞。しかし鈴木大介は41歳で発病した。

ノンフィクション本好きなら、この鈴木大介という名前に見覚えがあるかもしれない。貧困家庭の子どもや虐待などから家出した少年少女、そのセックスワークや集団詐欺など一般社会から早い年齢で零れ落ちた人々を丁寧に取材しているルポライターである。過去、私も何冊か読んで書評をしたこともある気骨あるルポライターだ。

社会が注目している分野であり、仕事の依頼も多く多忙を極めていた2015年の初夏、地元の消防団の消火訓練中、左手指にしびれを覚えた(ルポライターが消防団？と疑問を覚えた方もいるだろうが、これも病気の遠因になっている)。

病気はこんな風に始まった。音声入力で原稿を書いていた鈴木がある朝、パソコンの前で仕事を始めると自分の発音を認識

してくれなくなったのだ。「彼女」といつているつもりが「あおお」、「宝物」が「あああおお」。呂律が回らず激しい眩暈と視界の歪みが起こっている。これは脳が壊れたに違いない。

予感があったのだ。多くの依頼を受け、それに真摯に応えて書いてきた。収入も増え書きたいことを書けるようになり、また忙しさに拍車をかけ、疲労は限界に達していたのだ。過労死になるかも、と妻に万が一のときの連絡先を渡していた予感が的中してしまったのだ。

脳神経外科で右側側頭葉のアテローム血栓脳梗塞と診断され、ただちに血栓を溶かす薬が投与された。手当が早かったためと、血栓で機能しなくなった脳の範囲がそれほど広くなかったため、治療後すぐに歩けたが、それでも後遺症は残った。「半側空間無視」という左方向がまったく見られなくなったのだ。真っ直ぐ動いているつもりでも右旋回し、左側に何があるかわからないため、左腕や左足がぶつかりまくる。人と話をしている左側をどうしても見ることができず、右上方を凝視してしまうのだ。

他にも左手指の麻痺が残った。指を見ながらゆっくり「動け」と念ずるとギシギシと動き始めるが、握り込むとそのまま、今度は開くことができずジャンケンができない。まずのリハビリ目標は谷啓の「がちょーん」ができることに設定された。

リハビリは反復訓練である。ひとつ出来るようになったら徹底的に繰り返す。子どものころサッカーのリフティングを練習したように、ただただ繰り返す。伴走してくれるのは優秀なリハビリの先生たちだ。ひとりひとりの症状を観察して吟味し、ピンポイントで苦しい練習を課す。それが少しずつ成果をあげ、患者は達成感を得ていく。

“よっぽど頑張っているんだって、分かるよ。やればやっただけ回復するし、やらなきゃ一つも進まないんだからね。見てれば分かるよ”

少々キツイ感じで苦手な看護師からのエールだ。彼は声を殺して泣いたという。

器質的な後遺症は、根性論的なものでも前進する。しかし脳の損傷が、感情に影響し、それはそう簡単にリハビリできるものではなかったようだ。その克服は、かなり苦しみを伴うものだった。

#### リハビリの中で得た気づきと希望

高次脳機能障害によって感情のコントロールができずに泣き続けたり、注意力が極端に欠損したり、本や漫画を読むことができなくなったり、という症状をすこしずつ改善すべくリハビリを続けるうちに、突然、鈴木大介は気づいたのだ。



自分の脳の欠損によって出ている症状や態度は、いままで自分が取材してきた幼児期に愛情を注がれなかったり、虐待によって感情が無くなったりした子供たちの「発達不全」と似ているのだ。コミュニケーションや他者への共感力は教育と訓練と経験によって培われるものだ。自分の場合は脳梗塞という病気であるべき能力が奪われたのだが、彼の取材してきた子供たちは発達不全のなかで、その能力が獲得できなかつたのではないか。

リハビリ病院の療法士は有能だ。だがその能力は高齢者と自分のように病気やけがによって脳を損傷したものにしか適用されない。貧困層や発達障害の子どもに彼らの力が生かされたら、問題の多くは解決されるかもしれない…。

多くの取材対象を持っている鈴木大介だからこそ気づいたことだ。今までは同情や社会批判などの外の立場から取材してきたことが、脳梗塞をやったことで、当事者と近い気持ちを持つことができ、解決策に近づけるかもしれない、という希望を持つまでに至った。

とはいえ高次脳機能障害はいまでも残り、日々の生活で怖い思いをたくさんしている。NHKの集金員に恫喝されたり、感情が激昂しすぎて友人に号泣しながら泣きついたり、ということもあるようだ。

後半は「私はなぜ脳梗塞になったか」を分析していくのだが、なるほど、これは病気になるわな、と誰もが思うことばかり。参考になる人もならない人もいるだろうが、その分析をしなければ、再発率が極めて高い脳梗塞という病気に相対できないだろう。

普通の人ならば絶望的になる「脳が壊れる」という状態を、客観的にルポ一冊にまとめたのは、やはり今までの取材経験がものを言っている。この病気によって鈴木大介が描く貧困の少年少女の姿と社会保障や医療への取り組みは新たな方向性を得た。彼が今後、どのような取り組みを行っていくのか、大変楽しみである。

## 人材不足の介護現場にロボットを 宮本隆史さん(31) 朝日新聞 2016年7月15日 宮本隆史さん



少子高齢化で労働力人口は減りますが、介護が必要なお年寄りは増えていく。今でも介護人材は不足していますが、国全体を考えれば介護だけに人を割くわけにはいきません。そうなる、一部の仕事をロボットに頼らざるを得ない日が来ると思います。

3年前に介護職員や技術系職員ら10人弱で「介護ロボット研究室」を立ち上げました。試作品を含めると、50種類ぐらゐの機器を試しましたが、ほとんどが使いにくかったです。

例えば、高齢者をベッドから車いすなどへ移乗させるリフト。介護職員なら抱きかかえて5秒ほどで移乗できるのに、リフトを使うとハンモックのようなつり具を装着するなど準備も必要で、何十秒もかかる。介護職員の腰痛予防にはいいのですが、時間に追われて使う余裕がありません。

湿気を感じておむつ交換のタイミングを知らせてくれる装置は誤報続きだったり、体に装着するタイプの動作支援ロボットは長時間使うとバッテリーのせいで腰が熱くなってきたり、いろいろ苦勞があります。

一方、ベッドからの転倒防止に使う見守りセンサーは現場で役立っています。高齢者のシルエットがスマートフォンなどの端末に映し出され、ベッドから起き上がったたり、はみ出したり、離れたりと知らせます。転倒につながりそうと判断したら助けにいきます。見回る回数も高齢者が転倒する危険性も低下し、夜勤の負担が減りました。

愛らしい人型のコミュニケーションロボットにレクリエーションを任せる試みも成功例です。ロボットが司会をして、テレビ画面でクイズを出します。高齢者の方の笑顔が増えました。

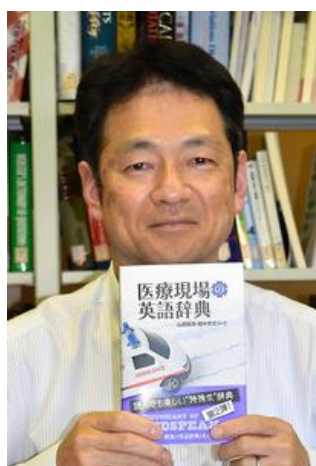
今月、研究室名を「介護ロボット・人工知能研究室」に改めました。人工知能によって、もてなしや思いやりの心が再現された人型ロボットが、介護職員と一緒に働く日もくるのではないのでしょうか。政府には新しいことにチャレンジする事業者の背中を押すような施策を期待したいです。

ロボットを使うことへの拒否反応は高齢者より介護職員に多い気がします。介護は高齢者の人生の最期を支える究極の対人サービス業で、100人いれば100通りの個別支援が必要。身体介助など技術的なことが注目されがちですが、未来の介護職員は高齢者が何を望んでいるのか今まで以上にくみ取り、個別支援に生かす能力が求められるかもしれません。人だからこそできることを追求していくべきだと思います。(聞き手・水戸部六美)

## 医療スラング3000収録 「医療現場の英語辞典」出版 奥平真也

朝日新聞 2016年7月14日

「医療現場の英語辞典」を完成させた田中芳文教授＝島根県出雲市の県立大学



knife—happy (ナイフ・ハッピー)＝やたらと手術をしたがる外科医、city taxi (シティー・タクシー)＝救急車をしょっちゅう呼んで病院までただ乗りする人——。島根大と県立大の名誉教授、山田政美さん(79)と県立大教授の田中芳文さん(55)が共著「医療現場の英語辞典」(三省堂)を5月に出版した。米国の医療ドラマなどに登場するスラング(俗語)や業界用語約3千項目を収録。「読み物としても楽しんでほしい」(田中さん)という。

英語学が専門の山田さんはスラングを長年研究しており、田中さんは島根大での教え子。5冊目の共著となる。

田中さんは、米の医療小説や日本でも放映されたドラマ「ER」などで興味を抱き、様々な本を読み込んで約20年にわたりスラングの収集を続けた。一般の人には理解できない数多くの表現があることに感心したという。

たとえば「digging for worms」(ミミズを探して穴を掘る)は、その形状から「拡張蛇行静脈とも呼ばれる静脈瘤(りゅう)の手術」のこと。「chocolate highway」(チョコレート・ハイウェイ)は「直腸」「肛門(こうもん)」を指すという。

社会問題が背景にある言葉も。「positive suitcase sign」(陽性スーツケース徴候)は、家族に邪魔にされた高齢者がスーツケースを持たされ、病院に置き去りにされた状況の表現だという。

山田さんは「医学専門辞典も調べるなど苦労した。海外の小説やドラマに触れる際に役立つと思う」。田中さんは「スラングには、生死に関わる深刻な現場で緊張を和らげる効果もあるのだろう。生き生きとした人間の考えや習慣が伝われば」と話す。

四六判480ページ、税別2300円。主な書店で売っている。

### ◆辞典に出てくるスラングの例

【単語】acute MI

【意味】急性金欠病。MIは金銭的不足 monetary insufficiency の頭文字。患者が治療費を払えない場合を指して医学用語に似せた言い方。

【単語】knife—happy

【意味】やたらと手術をしたがる外科医。

【単語】city taxi

【意味】救急車をしょっちゅう呼んで病院までただ乗りする人。

【単語】coffee and newspaper

【意味】患者が便秘状態であること。飲み物と新聞を持ち込んで長時間トイレにこもること

とから。

【単語】 dirtball

【意味】直訳だと「糞（ふん）の玉」。病院に来てほしくない患者。

【単語】 digging for worms

【意味】直訳だと「ミミズを探して穴を掘る」。拡張蛇行静脈とも呼ばれる静脈瘤（りゅう）の手術のこと。

【単語】 chocolate highway

【意味】直腸、または肛門（こうもん）。

【単語】 positive suitcase sign

【意味】陽性スーツケース徴候。家族に邪魔にされた高齢者がスーツケースを持たされ病院に置き去りにされた状況。

【単語】 ringo

【意味】医療チームの中で使い捨てにされるメンバー。ザ・ビートルズのメンバーだった Ringo Starr から。

【単語】 terrible torture

【意味】直訳だと「ひどい拷問」。出産時の苦痛を表す言い方。

#### 岩手 花巻 福祉バスが横転 11人搬送

NHKニュース 2016年7月15日

15日午前、岩手県花巻市の交差点で車3台が絡む衝突事故があり、このうち障害者福祉施設のマイクロバスが横転して、乗っていた利用者11人が病院に運ばれました。警察によりますと、いずれもけがの程度は軽いとみられるということです。

15日午前10時前、岩手県花巻市円万寺の交差点で、市内の障害者福祉施設「わたぼうし」の送迎用マイクロバスが、乗用車と出会い頭に衝突して横転し、その弾みで、別の軽乗用車に接触しました。

バスには施設の利用者11人とドライバーと職員の合わせて13人が乗っていて、このうち利用者11人が救急車で病院に運ばれました。警察によりますと、11人は10代から40代でいずれもけがの程度は軽いとみられるということです。70代のドライバーと職員、それに、乗用車と軽乗用車に乗っていた人にはけがはないということです。

現場はりんご畑などに囲まれた交差点で、JR花巻駅から西におよそ3キロ余り離れ、信号機はありません。警察によりますと、乗用車が走っていた道路に一時停止の標識があるということで、事故の詳細な状況を調べています。

バスが事故にあった福祉施設の「わたぼうし」は、手工芸やリサイクル活動などを中心に知的障害者の生活を支援している事業所です。

#### 重要性高まる「市民後見人」 成年後見 需要増加に対応 地域で担い手を育成 東京・品川区

公明新聞：2016年7月15日

認知症や独居の高齢者が増加する中、判断能力が不十分な人を支える成年後見制度の担い手の育成が課題となっている。そうした中で今後、活躍が期待されるのが一般市民による後見人の「市民後見人」だ。市民の力を生かしながら、全国に先駆けて後見活動を進めてきた東京都品川区での取り組みを追った。

市民後見人の古賀忠壹さん（72）は月に一度、品川区内のグループホームで生活する女性（88）のもとを訪れる。

「元気でしたか」。優しく声を掛けると、女性は、にこやかな表情で応じるという。女性の顔色や生活状況に異変がないか確認し、施設への費用の支払いも行う。一見、親子のようなやりとりでも、二人に血縁関係はない。

女性は7年前、都営団地で一人暮らしをしていた。夫とは死別。認知症が進行し、リモ

コン操作さえ、できなくなっていた。担当のケアマネジャーが女性のきょうだいに相談したところ、成年後見制度を利用したいとの申し出があった。そして女性の担当になったのが古賀さんだった。

「気温が高ければ気になって電話したり、近くまで行ったら立ち寄ったり。家族のような存在だ」。施設の入所手続きも、女性が暮らしていけるようにと、古賀さんが進めた。「最近落ち着いて生活を送れるようになった」と手応えも感じている。

#### ◆協働の推進体制

古賀さんのような市民後見人は、自治体などが開く養成研修を受け、家庭裁判所の選任を受ければ活動できる。現在、後見人になるのは親族や弁護士など専門職が中心だが、成年後見の需要の増加とともに市民後見人養成の取り組みが広がりつつあり、2015年は全国で224人が選任された。

市民後見人の最大の強みは、地域で時間をかけて、きめ細かな支援ができることだ。品川区では、こうした見守りを中心とした市民後見人の役割に着目し、06年、区社会福祉協議会とNPO法人「市民後見人の会」の協働で養成講座をスタートさせた。

同会の会員は現在、60、70代を中心に約80人。古賀さんが理事長を務める。法定後見もこれまでに32件を受任した。区社協が市民後見人の監督人となり、相談や協力体制も整えて後見活動を支えている。

ただ、育成・活用の体制を整えても、市民後見人を増やすには課題も多い。活動時間の確保や、被後見人が債務を抱えているなど困難な事案もあるからだ。「後見人の報酬を聞かれることもあるが、報酬額は家裁が決める。高齢社会を見据えた社会貢献であり、ボランティアの活動だ」と古賀さんは指摘する。

区社協が関わる後見活動は現在、380件程度だが、同区内にある潜在的な需要はその10倍以上とみられる。区社協品川成年後見センターの小佐波幹雄係長は「あと数年で団塊の世代が75歳以上になり、制度利用者が爆発的に増える“後見爆発”も予想される」と語る。認知症高齢者の増加に伴い、市民後見人の重要性はますます高まっている。

#### ◆利用促進法が成立

ところが、現在の成年後見制度は、利用する上で多くの制約があり、親族や専門職が選任されるケースを含めても、制度の利用は全国で約19万人にとどまっている（15年末現在）。制度を普及させるため、今年4月、「成年後見制度利用促進法」が成立した。公明党が主導して実現した議員立法だ。

今後、内閣府に首相を会長とした成年後見制度利用促進会議と有識者委員会が設置され、制度の利用普及に向けた基本計画が策定される。また、制限されている被後見人の権利の見直しや後見人の不正防止策といった制度の改善、後見人を育成するための措置も講じられる。こうした動きの中で、市民後見人の支援体制の整備も急がれる。

各自自治体で体制づくりを 公明党成年後見制度促進プロジェクトチーム 大口善徳衆院議員

成年後見制度は高齢者や障がい者を支える仕組みとして、介護保険制度や高齢者、障がい者福祉制度と車の両輪をなすものだ。地域包括ケアの視点でも欠かせない。

弁護士や司法書士、社会福祉士であれば法律や福祉の専門知識を生かして、市民後見人であれば本人に寄り添った形で後見活動ができる。一人をチームで支えている地域もある。利用者の意思を最大限に尊重し、その人にマッチした体制を地域で整えられることが理想だ。

後見体制の基盤づくり、人材づくりは各自自治体で進めないといけない。審議会などを設置し、利用促進に向けた計画や施策づくりを、公明党としても地方議員と連携して進めていきたい。

認知症や知的・精神障がいなどで判断能力が不十分な人の財産管理や介護保険契約などを、



代理権や同意権、取消権が付与された成年後見人等が行う仕組み。家庭裁判所が本人の判断能力の程度に応じて成年後見人、補佐人、補助人を選任する「法定後見」と、あらかじめ本人が任意後見人を選ぶ「任意後見」がある。

## 20年代初頭に「地域共生社会」＝実現本部が初会合－厚労省

時事通信 2016年7月15日

厚生労働省は15日、地域全体で高齢者や障害者らを支える「地域共生社会」について、塩崎恭久厚労相をトップとする「実現本部」の初会合を開き、2020年代初頭の実現を目指す方針を確認した。

塩崎氏は席上、「今後の福祉改革の基本コンセプトに位置付け、制度改革や法律改正に生かす」と強調。関係部局の幹部に検討を指示した。

具体的には、介護福祉士や准看護師といった福祉・医療資格を取得するための基礎課程に関し、共通化することなどを想定している。

## 知的障害者を12年間無給で働かせた60代夫婦を検挙 / 忠北・清州市

牛44頭の飼育に従事、倉庫の片隅の小部屋で生活 19年前に失踪、小学生より知能が劣り「年取った子ども」呼ばわり

朝鮮日報 2016年7月15日

知的障害者に対し、12年近くにわたって賃金を支払わずに仕事をさせていた60代の夫婦が警察に検挙された。

知的障害2級のAさん(47)は2004年ごろから、忠清北道清州市清原区梧倉邑にあるK容疑者(68)の畜舎で、44頭の牛を飼育する仕事に従事し、畜舎の隣にある倉庫に設けられた広さ6.6平方メートルの部屋で暮らしていた。知能が小学生よりも劣るとされ、近所では「マンドゥギ(年を取った子ども)」と呼ばれていた。

Aさんは以前、清州市興徳区五松邑に住んでいた。K容疑者の畜舎がある梧倉邑からは20キロほど離れていた。Aさんは1997年夏に家を出た後、道に迷って帰れなくなったと推定されている。現在知られているのは、Aさんが2004年ごろ、牛の仲買人に連れられてK容疑者の元へ来て、それから12年間無給で働いてきたということだ。Aさんの母親(77)は現在も五松邑に住んでおり、19年前に息子が行方不明になったとして、警察に届け出た。

Aさんの奴隷のような生活はあっけなく終わった。今月1日午後9時ごろ、Aさんは集落の近くにある工場の軒下で雨宿りしていた。そのとき、警備会社が設置した警報器が作動した。現場に出動した警備会社の警備員は、Aさんを警察に引き渡した。警察はAさんをK容疑者の元へ連れていき、それから1週間後、K容疑者を読んで事情聴取を行ったところ「賃金は支払っていなかったが、監禁したり、強制的に働かせたりしてはいない」との供述を得た。警察は14日午後、Aさんを病院に入院させた。Aさんはまだ母親と再会してはいないという。

清州＝劉泰鍾(ユ・テジョン) 記者

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行